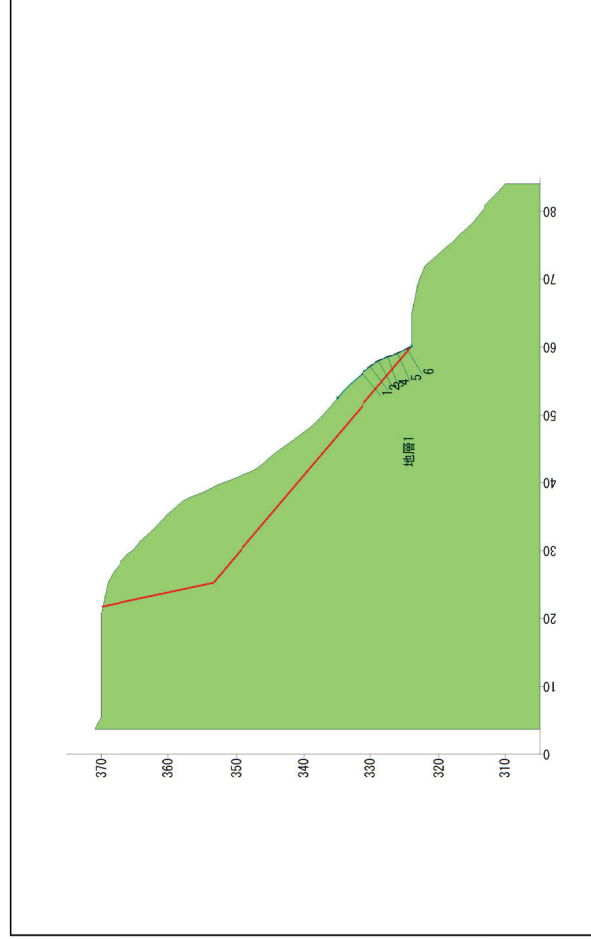


4.応急対策の基本方針

4.4 緊急応急対策

想定地すべりに対し跳ね上げを考慮しない場合、鉄筋挿入工6段で安全率は1.05を確保できる試算結果となる

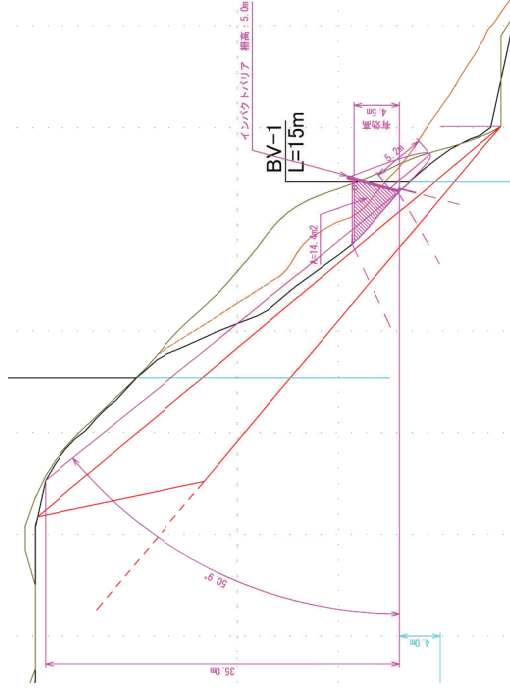


補強材配置後の安全率結果		項目	記号	単位	数 値 (仮設)
計算結果	補強前安全率	Fs	-		1.000
	計画安全率	Fsp	-		1.050
	補強後安全率	Fs	-		1.053
計算要素	引き止め力	Sh	kN/m		79.586
	締め付け力	Ss	kN/m		149.482

施工段数： 6 段

地すべりの跳ね上げを考慮した場合安全率1.05以上を確保するには鉄筋挿入工13段程度が必要となる。この為末端部での監視・巡視による安全管理を行い現道下り車線を利用し緊急車両等の通行を確保。

想定地すべりに対し跳ね上げを考慮しない場合、鉄筋挿入工6段で安全率は1.05を確保できる試算結果となる



検討条件

項目	記号	値	単位	備考
欄高	h	5.0	m	
支柱間隔 (端末)	Xs1	5.0	m	最大値
支柱間隔 (中間)	Xs2	5.0	m	基本支柱間隔
斜面高	H	35.0	m	
移動の高さ	h _{mov}	1.0	m	
急傾斜地の勾配	θ _a	50.9	°	=ボケット幅
急傾斜地下端から対策工までの距離	X	0.0	m	=平組勾配
急傾斜地下端から対策工までの勾配	θ _a	0	°	

対象断面における単位崩壊土量と欄の土砂捕捉容量

断面	斜面高 H (m)	単位崩壊土量 A _d (m ³ /m)	土砂捕捉容量 A (m ³ /m)	A ≥ A _d
側線A	35.00	9.6	14.4	[OK]
側線B		9.6	15.2	[OK]
側線C		9.6	12.5	[OK]
側線D		9.6	11.6	[OK]
側線E		9.6	13.5	[OK]

インバクトバリア NO-Xは、実験で確認した標準部材以上の部材を使用することを前提により衝撃力F=374kN/m²以下に対応することができる。
なお、崩壊土砂堆積時の作用荷重が各部材設計耐力を上回るケースには使用部材を変更する。

$$F = 142.6 \text{ (kN/m}^2\text{)} \leq 374.0 \text{ (kN/m}^2\text{)} \dots \text{ [OK]}$$